

閉会挨拶：古村伸宏（日本労働者協同組合連合会理事長）

会場にお越しの皆様、そしてオンラインで参加された皆様、長時間にわたるフォーラムにご参加いただき本当にありがとうございました。

今日は会場には 112 名の方がお集まりになり、そしてオンラインでは 235 名、合計 347 人の参加ということで、数的にも成功と言っていると思いますし、冒頭から今日のこのフォーラムは私の大好物の話だらけで、本当にいろんなものをたくさん食べて、体のいろんなところでうずうずいろんな生き物が大きいうごめき出したという、そんな印象を持つ半日間でした。

私も労働者協同組合に入ってもう 38 年という月日が流れていまして、日にちに直すと 13,000 日間、労働者協同組合をやっているということなんですけど、今日聞けば聞くほど歴史は単に積み上がるだけではなくて、いろんな動きをしながら、予測もつかない動きをするんだな、というふうに思いました。

ある意味、私は労働者協同組合を 38 年やってきたという自負はありますけれども、それが決して正解であり正しい、とは言い切れないことの方がむしろ多いのではないかと、思いました。

その意味で藤原先生の著書になぞらえて私の労協の歴史をもう一回分解しなきゃいけないな、ということを感じさせられる時間なんだなと思います。

昨日比較的早く帰れたので、テレビで NHK のスペシャルで『話そう!“学校”のみらい 不登校 30 万人から考える』という特集をやられておりました。

今日もフラヌイスコールのお話、不登校というそのテーマにも重なる話なんですけども、以前から子供に限らず、人々にとっての学びというのはどうやったらいいかということと、今日大きなテーマであった「はたらく」あるいは「はたらき」のあり方というのは何か、同じように苦しいところへと向かってきたのではないかなという印象を持っていました。そこからどう抜け出していくのか、そしてどこへ展開していくのかそういうヒントが働く、あるいは「はたらき」っていうことで言うと、労働者協同組合がその一つかもしれない。そして学ぶあるいは学びの在り方の方向性の一つがフリースクールかもしれない。

いずれにしてもこれまでこうであるべきだ、あるいはこれが正解だ、というものをもう一度疑ってかかる時代に、今、私たちは生きているのではないかとすごく感じています。

ずっと半日間ですね、THE BLUE HEARTS の『情熱の薔薇』の歌詞がずっと頭の中を駆け巡っていたんですけれども、ご存知ですかね。「見てきたものや聞いたこと今まで覚えたデタラメだったら面白いそんな気持ちわかるでしょうか」。ちょっと茶化した言い方かもしれませんが、特に藤原先生の話がずっと聞いていると歴史ということもあるんですけども、もう一方で私たちが普段何気なく使っている言葉というものをもっと丁寧に扱わなければいけないということを殊更に感じましたし、あるいはその言葉を丁寧に扱うというのは、今日提案をされた労働の概念というものをもう一度問い直し、立て直していくということにもつながっていく大事な作法なのではないかな、とも感じたところで

やはり、この労働者協同組合は今日の 3 つの事例も実に多様で、多彩な主体の方々がつながるつながり方でしょうし、そういうつながりが地域や社会、あるいは他の人々とどうつながるかという意味でも、多様な仕事をそこから編み出していくという大きな可能性を持った仕組みであることは間違いないだろうなということを、私自身も実感しました。

ただし、事はそう簡単にいなくて、つながりを一度見直してもう一度結び直すというのは、ある意味で言うときには痛みを伴ってみたり、自分自身を否定してみる、みたいなこともあるわけですし、あるいは、きれいにつながればそれでいいですけども一旦繋がったと思ったらまた切れてしまうということもまた、繰り返されていくんだろうというふうに思います。

労働者協同組合がおそらく人と人の関係あるいは人と仕事の関係、そして仕事と自然との関係、あらゆる関係を見直していく一つの手立てであり、そして労働者協同組合という場所がその関係を見直しつつ、もう一度その関係を再定義していくそして再構築していく、そういう大きな実験場とでも言えるのではないかなというふうに感じました。

その時大事なものは、最近、特に共生という言葉はよく使われますし、その考え方あるいは方向性、理念というものは私も共感するところですけども、もう一方で今日の話もそうでしたけれども、共にあること、存在することをまず肯定する、というのは、おそらく共生というよりは共存という言葉の方がぴったりくるのではないかなというふうに思います。

そういう意味で言うと、共存ということを中心に合うようなコミュニティ、これはまさに人間社会のありようということでしょうし、それから共存ということを中心に、この日本という国における世界にも特徴的だと言えるのが、おそらく里山のようなあり方なんだろうということも今日改めて感じたところでありました。その心はといいますか、その精神がおそらくお互い様という言葉でありますし、英語でいうと CO、あり方ということ、仕組みの問題もありますけど私たちがどう体感するかということが、この労働者協

同組合に取り込んでいく上で最も大事なことなんじゃないかなと感じたところでもあります。いずれにしても、今日の話の多くも、いろんなつながり方を通じて直接的には身近な、あるいは目の前にある小さなことかもしれないけど困りごとや課題ということを結び目にしながら、そこから労働者協同組合やあるいは協同労働っていう実践が始まっているということなんだろうというふうに思います。

一方で課題のまま解決するだけではなくて、その課題を魅力に変えてしまうようなそういう「はたらき」が一人一人の労働の中に、あるいは労働者協同組合という組織の中に、そして協同労働というあり方の中にひょっとしたら可能性としてはあるんじゃないか、そういう魅力が多くの人たちをこれからますます惹きつけていけるような、そういう労働者協同組合を知らせていく、そして活用していく。そういう取り組みを今日集まった皆さんが直接やるかどうかは別として、労働者協同組合、協同労働というものが世の中に作られていくことによる社会の変化というものをどう感じていくのか、その当事者として明日からぜひ、小さな力をちょっとずつでいいですから発揮いただければと思います。

そして、この、労働者協同組合、そして協同というものが最終的にはと言いますか、特に今の時代的な局面で言うと平和ということにどう役立つのかということも絶えずしっかり手から離さずに持ち続けるような取り組みにしていきたいな、そんなことも呼びかけて今日のフォーラムを終了させていただきたいと思います。

半日間、本当にご苦労様でした。